

早6月を迎えました。旧暦では5月、この月に降る五月雨は梅雨を指しています。五月雨の他にも、冬から春にかけての春雨、あるいは菜種梅雨、夏から秋への長雨を秋雨と呼ぶなど、日本語には、雨ひとつをとっても、季節感やその情景から細やかな呼び名が使われています。そしてそればかりか、梅雨の長雨になぞらえ、ものごとがだらだら続くことを「五月雨式」と表現するなど、雨に個性すら与えています。

古代から日本列島を「瑞穂の国」と自賛しているように、国を成り立たせた稲作文化の胚胎に関わった彩のある四季の移ろいとその時折の雨への、ある種の畏敬がそうさせたのではないかと、梅雨のさなかに想いを巡らせています。

それでは、今号も発掘調査成果とセンター事業を紹介いたします。

発掘調査だより

伊勢遺跡の第135次調査の結果

前号でも報告しました135次調査は、本年度も引き続き実施し、5月18日に終了しました。

令和5年度調査は、前年度に行った造成地内の道路予定地のうち、未着手分の約200㎡の範囲を調査したものです。

調査対象地に調査区1、2を設けて調査した結果、調査区1では竪穴建物1棟、土坑4基、溝2条、ピットを、また、調査区2では土坑3基とピットを検出しました。



調査区1 遺構検出風景



調査区2 遺構検出風景

調査区1の竪穴建物は全体の3分の2程度の検出にとどまりましたが、一辺が約6.2mの方形プランになります。埋土の黒褐色粘土を掘削すると、15cm～20cmの深さで建物の床面が現れ、支柱穴2穴と貯蔵穴と考えられる土坑、途切れながら壁際を巡る周壁溝を検出しました。

支柱穴は直径約26cm程で、約30cmの深さを測ります。土坑は、建物南辺中央に位置し、約1.2m×1mの大きさで、深さ60cmを測ります。

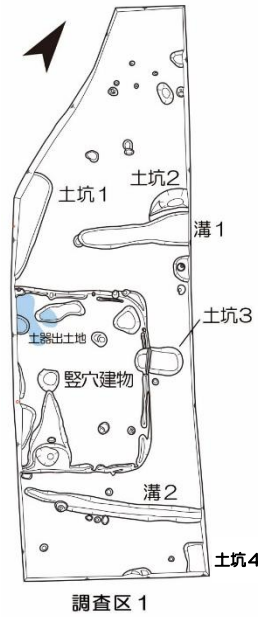
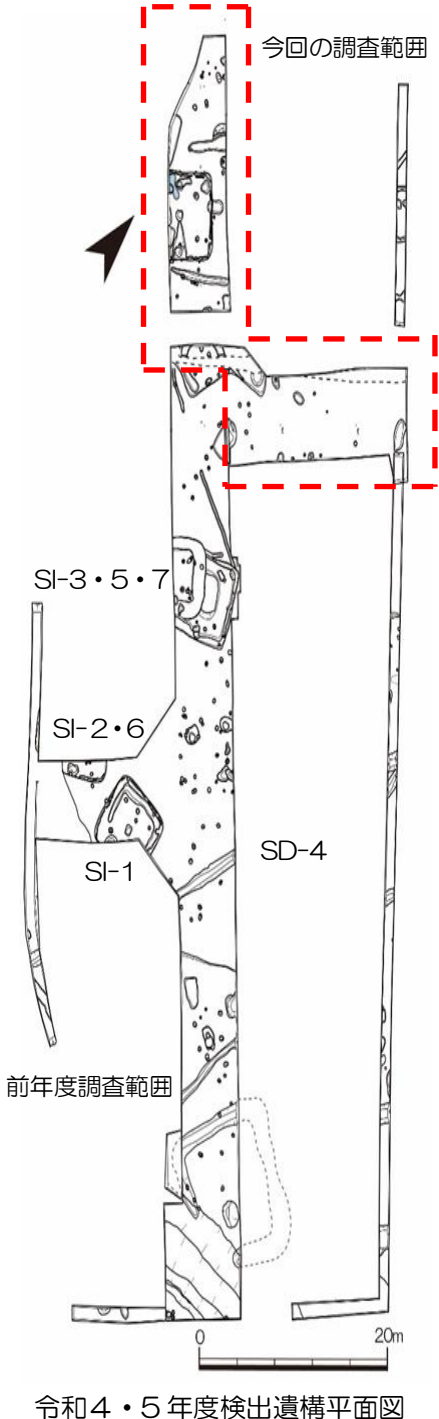
建物西辺の床面からは土器がまとまって出土しています。受口状口縁の壺や甕と、高坏、器台、鉢などで、とりわけ高坏と器台が多く出土しています。

調査区1では、上記の他に土坑1～4を検出していて、そのうち土坑3は竪穴建物に重層しています。

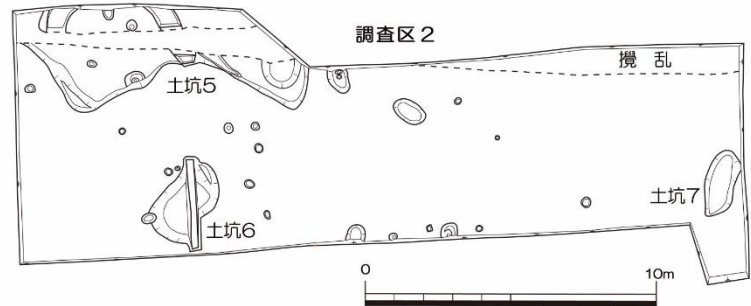
溝1と溝2は、竪穴建物を挟むように東壁より南西に向かって伸びます。規模は幅60cm～100cm、深さ10cm～15cmで、溝1、2ともに調査区内で収束します。

調査区1の南東側に設けた調査区2では、前年度調査で断片的に検出し、竪穴建物（SI-4）と性格づけた遺構の続きを検出しましたが、調査の結果、建物というより不定形土坑（土坑5）とすべき遺構であることがわかりました。その他にも土坑6、7とピットを検出しています。

以上が今回の検出遺構・出土遺物のあらましになります。



竪穴建物(上)・土器検出状況(下)



検出遺構平面図（令和5年度分）

ここで、前年度調査を含めて、第135次調査の成果をまとめたいと思います。

今回の調査で検出した竪穴建物1棟と溝、土坑は概ね弥生時代後期の時期と考えられます。

竪穴建物は、前年度分を合わせて7棟を検出しました。近接地の調査でも、竪穴建物が疎らに検出されていて、今回の調査地を含めて同一集落を形成していたことがうかがえます。そして、前年度調査で検出した調査地中位で南北に伸びる溝SD-4が集落域を画していたのでしょう。

今後、検出遺構と出土遺物を精査し、第135次調査の成果を報告することになりますが、ここでは、出土遺物の受口状口縁壺に刮目してみました。

まず、受口状口縁壺は、受口状口縁甕とは異なり、弥生時代後期に一過的に出現する比較的希少な土器と言えます。135次調査では、SD-4と竪穴建物から出土していますが、第4次調査でも五角形住居から出土しています。両者の比較からは、併存もしくは建替え程度の時期差しかないものと考えられ、一般住居とは機能が異なる五角形住居は集落域から距離をおいたと想像を逞しくすることもできます。（畑本）

春季講演会を開催しました！

5月20日（土）に開催した春季講演会は、石黒立人さん（元愛知県埋蔵文化財センター副所長）に講演していただきました。

東海地方の考古学界を牽引する石黒さんは、特に弥生時代に造詣が深く、かねてより琵琶湖に抱かれた滋賀県が弥生文化の形成にとって重要な役割を果たしたとの考えを持られています。

今回、「弥生文化の十字路、琵琶湖地域」をテーマにした講演では、東海、北陸、近畿の土器や玉作り、あるいは木偶、特



講演風景



受講風景

徴ある竪穴住居などの発掘事例について、ネットワーク、伝播という視座から綿密に捉え、ヒト・モノの結節点である琵琶湖地域、つまり滋賀県の重要性について持論を展開されました。

県内在住者が大半を占める60名あまりの受講者は、滋賀県が流通や文化にとっての要衝の地であることを再認識しているようでした。

石黒さん、ご講演ありがとうございました。

埋蔵文化財センター友の会総会・第1回見学会を開催しました！

5月30日（火）、友の会総会および第1回見学会を開催しました。

甲賀市勤労青少年ホームでの総会開催後、午後からは甲賀市歴史文化課の佐野正晴さんの案内を受け、水口歴史民俗資料館、水口城の見学と東海道水口宿の現地研修を行いました。

当日は天候が心配されましたが、梅雨の中休みといったところでしょうか、午後からは晴れ間が見え、プラタモリでも放映された宿内三筋路を散策することができ、参加者は有意義なひと時を過ごすことができました。

佐野さん、お忙しい中、ありがとうございました。



見学先の水口城資料館



水口宿内散策風景



水口城資料館見学風景



昼食風景（於魚兵衛）

夏休み考古学教室 開催のお知らせ

恒例の「古代の鏡づくり体験」下記の日程・内容で開催いたします。広報もりやま7月1日号に掲載のうえ、参加者を募集します。

開催日時 ① 7月31日（月）市内の小学生対象（小学3年生以下の場合は保護者同伴）

② 8月5日（土）市内の小学生とその保護者（親子で鏡をつくります。）

いずれも午前9時30分～11時30分

場 所 埋蔵文化財センター2階

参加費 600円（材料費）

令和5年度歴史入門講座 「野洲川流域の弥生文化を探る」

只今、受講者を募集しています！ 毎講午前10時開講

第1講 6月17日(土)

「伊勢遺跡を俯瞰する」 講師：伴野幸一(守山市教育委員会)

第2講 7月15日(土)

「土器からわかる近江の弥生文化」 講師：伊庭 功氏([公財]滋賀県文化財保護協会)

第3講 8月19日(土)

「弥生時代の大型建物からみえてくるもの」 講師：鈴木康二氏([公財]滋賀県文化財保護協会)

第4講 9月16日(土)

「木製品の製作からみた弥生時代の生産」 講師：阿刀弘史氏([公財]滋賀県文化財保護協会)

第5講 10月21日(土)

「墓から見た弥生時代社会の構造変化」 講師：宮崎幹也氏(元米原市教育部理事)

第6講 12月16日(土)

「大岩山銅鐸と伊勢遺跡」 講師：進藤 武氏(元野洲市銅鐸博物館館長)

開催場所：守山市立埋蔵文化財センター2階会議室 / 受講定員：60名(先着受付)

◆歴史入門講座受講・埋蔵文化財センター友の会入会申込み先

守山市立埋蔵文化財センター

TEL&FAX 077(585)4397

これまでの乙貞や新着情報は、『歴史のまち守山』やFace Bookからもご覧いただけます！



←歴史のまち守山はコチラから

<http://moriyama-bunkazai.org>

守山市立埋蔵文化財センターFacebook ページはコチラから▶

<https://www.facebook.com/MaibunMoriyama/?ref=bookmarks>



【後記】「梅雨に入ったころ、苗代の苗が生長して田植えの季節となる。それぞれの村では水利の事情によって田植えの日時が決められていた。村中が一斉に田植えを始める。」

これは高橋正隆先生がお書きになった「私稿 下之郷の歴史」の一節です。おそらくは昭和30年代の事でしょうが、下之郷にかぎらず、どの集落も田植えは一家総出は言うに及ばず、雇人も相まって、朝から晩まで田圃は多くの人々で賑わっていました。米の字を振り、米づくりは八十八の手間がかかるという喩えがあるほど、田植えや稲刈りは手間ひまを要する集約農業であったのです。

1960年当時、米づくりには一反(10a)当たりの農作業に174時間の人手を費やしていました。しかし、昭和30年代以降の機械化や品種改良、農薬の使用によって、平成(2017年)には22時間ほどにまで省力化されています。人々は短時間で農作業を終え、そそくさと立ち去り、田圃はたちまち閑散とする。それが昨今の田植えの情景です。

米づくりは弥生時代に遡ります。そして今日まで二千年以上の歴史があります。その過程で農法は大きく変革したものの、少なくとも米づくりには人が介在し、重労働ではあるが活気に満ちた生業という点は脈々と受け継がれています。しかし、昨今、ドローンによる直播栽培や無人の農機による稲刈りなどが実用化されつつあります。近い将来、人の気配のない無機的な米づくりの農法が波及した時、長きにわたって醸成されてきた日本の稲作文化が終わるのではないかと思えてなりません。(馬耳東風)